



アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について

李, 倩

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2025-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8788号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490013>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について

氏 名 : 李 倩

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 茶谷 直人 教授
(副) 佐藤 昇 教授
(副) 新川 拓哉 講師

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

論文内容の要旨

人間は社会生活において、身体的に独立した個体として生きているが、実際には他の人々と共に生きる必要がある群棲動物である。今から二千年前、アリストテレスはすでに人間とポリス共同体の関係を探究していた。アリストテレスの『政治学』（以下ではPo1.と表記する）によれば、人間は生まれつき政治的動物（politikon zōion）であるため、もし国家に抛らない者があるなら、その者は人間として劣悪な者か、あるいは人間を超えた者かのいずれかである（Po1. 1253a1-4）。古代におけるアリストテレスの思想を研究することによって、現代の人間にも新たな啓示を与えることができると筆者は考えている。

本研究は主に、アリストテレスの政治哲学において個人とポリス共同体にどのような繋がりがあり、個人とポリスがいかなる順序で形成されるのかを明らかにするものである。アリストテレスのPo1.によれば、共同体は時間的に、個人、家庭、村落の順序で発展し、最終的に自足した状態になってポリス共同体（国家）を形成する。しかし、ポリスはその自然本性上、他の共同体よりも先に形成されるものである。この点に関して、アリストテレスは次のように述べている。「実際、国家は自然にもとづいて、家やわれわれの各人よりも先なるものである。なぜなら、全体は必然的にその部分よりも先なるものだからである」（Po1. 1253a18-20）。つまり、ポリスは、その発生過程では個人に遅れるものであるが、本性的には個人より先なるものである。一方で、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』（以下ではENと表記する）において、「家がポリスよりも先なるものであり、より重要なものである」（EN1162a18-19）と一見矛盾的なことを述べている。この点は、時間的に共同体の生成上の順序を指すと解釈されることが多いが、共同体が形成される順序について、アリストテレスの実際の議論には、彼の結論と矛盾する点があるように思われる。したがって、本論文はこれらの不明確な点の解明を試みる。

本研究では、個人とポリスのつながり、そして両者が形成される順序について、四つの観点から研究する。すなわち、第一に、アリストテレスの善の理論に基づき、「個人における善」と「ポリスにおける善」の関連を考察する。第二に、アリストテレスにおける最善の国制を分析する。第三に、人間としての徳と市民としての徳の差異を解明する。第四に、市民的友愛の本質を探究する。最後に、以上の四つの側面を分析することによって、個人とポリス共同体の関係性をまとめ、両者が形成される順序を解明する。そのため、本論文は五つの章から構成される。具体的には下記の通りである。

まず、第一章において、筆者は「個人における善」と「ポリスにおける善」について議論する。アリストテレスの実践学においては、「善」（agathon）が極めて重要な概念である。アリストテレスの倫理学と政治学の思想の両方とも「よく生きること」を人間の共通の目的としている。アリストテレスによると、幸福は人間のあらゆる行為の中での究極目的であり、そして善においても最も善いものだと見なされる。そのため、人間とポリス共同体の最終目的である幸福を研究するために、人間の行為を引き起こす最初の原因である善から始めるべきであると筆者は考えている。アリストテレスは、ENとPo1.の両方の冒頭において、個人でもポリス共同体でも、その自身の働きを維持するために、何らかの善を目指す必要があると示唆している。一方において、アリストテレスはENの冒頭において、善に関して次のように述べている。「あらゆる技術及びあらゆる探究の道筋、同様にまた、行為と選択も、何か善いものを求めているように思われる。したがって、『それこそ善いものとは、すべてのものが求めているもの』と表明されてきたのもうなずける」（EN1094a1-3）。他方において、Po1.では、「われわれの見るところ、すべての国家（ポリス）はある種の共同体であり、またすべての共同体は何らかの善のために構成されている

以上(なぜなら、すべての人はあらゆる事柄を善と思われることのために行うからである)、明らかにすべての共同体は何らかの善を目指しており、すべての共同体のうちでも最も有力で、その他の共同体を包括するものは、あらゆる善のうちで最も有力な善を何にもまして目指している。これこそが、国家と呼ばれるもの、つまり国家共同体にほかならない」(Pol. 1252a1-7)とアリストテレスは述べている。倫理学と政治学において、それぞれに対応する善は、「個人における善」と「ポリスにおける共通善」である。本章は主にその二つの善をめぐる研究である。本章において、筆者はまず、アリストテレスにおける善の分配理論を検討することによって、アリストテレスが全体主義者であるのか、それとも個人主義者であるのかを探究する。それから、アナログアの考え方をを用いて、アリストテレスの政治理論を分析し、政治的な「善」に関して筆者の理解を示す。以上の議論を通して、筆者は、アリストテレスの理論が全体主義と個人主義の間で揺れ動いたと考えている。アリストテレスはポリスの共通善を強調しているが、彼の具体的な政治的主張は WP (the whole-part conception) により近く、そして個人の善が共同体の善のために犠牲になるとは認めないため、彼は適度な個人主義者であると筆者は考えている。この結論はまた、アリストテレスの中間思想が彼の政治的主張に影響を与えたことを反映している。

第二章は、最善な国制とは何かを議論するものである。アリストテレスによれば、それぞれの共同体には各自の国制がある。国制は共同体のものの配分によって決められたものである。ポリスにおける支配権をもつものは、一人か、少数者か、多数者かのいずれかに該当する。一人で支配する場合は王制と呼び、少数による支配制を貴族制と呼び、多数者が支配する国制は共和制である。これらの三種類の国制はアリストテレスの政治哲学においては正しい国制である。正しい国制の共通点は、ポリスが必然的に最善の人間によって治められることである。しかし、たとえ支配者が一人であれ、少数者であれ、多数者であれ、専ら自分の利益のために支配するなら、結局、元々正しい国制も逸脱した国制になってしまう。すなわち、王制から逸脱したものは僭主制であり、貴族制から逸脱したものは寡頭制であり、共和制から逸脱したものは民主制である。アリストテレスは理想的な視点と現実的な視点から最善の国制について論じた。本章は、理想と現実、単一の国制と混合した国制という二つの視点からアリストテレスの言う最善の国制とは何かについて詳しく議論する。アリストテレスは、理想的な状況において、最善な国制は王制であるべきだと考えているが、現実には、ポリスが神のように完璧な支配者をもつことは難しく、神のように完璧な人間もほぼ存在しないため、実現可能性を考える場合、完全な徳をもつ少数者による支配の貴族制が最善な国制である。一方で、ポリスが王制から僭主制に逸脱した場合、僭主制はあらゆる国制の中で最も悪いものである。したがって、アリストテレスは実現可能性とリスクから見れば、ポリスは多数者によって統治されるべきだと主張した。なぜなら、多数者はポリスの大多数の利益を代表し、ポリスの中で最も安定した集団だからである。以上は単一の国制の視点から分析したものである。しかし、アリストテレスによれば、異なるポリスにはそれぞれの特徴があるため、すべてのポリスに適用できる単一の優れた国制を見出すことは極めて難しい。そこで、アリストテレスは、優れた立法者たちはポリス国家の実際の状況に基づき、そのポリスに適した国制を制定すべきであると主張している。そのため、アリストテレスは「中間の国制」を提案する。そして、アリストテレスは個別の問題に対してそれぞれ個別に分析して中間の考え方によって国制を制定すべきであると主張している。筆者は、最善の国制について語るとき、ポリスの実際の状況に即して国制を思考すべきだと考えている。

第三章において、筆者はポリスにおける優れた市民の徳と善き者の徳は同じものであるのか、それとも異なるものであるのかという問題をめぐって議論する。また、この両者の

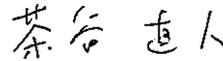
徳の繋がりを明らかにする。アリストテレスによれば、最善のポリスでは、善き者の徳は優れた市民の徳と一致している。しかし、最善のポリスでなければ、善き者の徳は優れた市民の徳と一致しない。なお、アリストテレスは最善のポリスでない場合において、優れた支配者としての徳は、善き者としての徳と一致すべきだと主張している。アリストテレスは、優れた市民の徳と善き者の徳の差異について、次のように指摘している。まず、優れた市民の徳と善き者の徳における区別は単一性と多様性の違いである。アリストテレスによれば、善き者の徳は単一の善である。これに反して、ポリスの国制の違い、あるいは市民が従事する職業の違いのため、市民の徳は多様なものであり、単一の判断基準は存在しない。次に、優れた市民と善き者に関する判断基準は異なっている。アリストテレスが求める善き者の徳は、ある種の「善を尽くし美を尽くす」のようなものである。ただし、ポリスの市民にとっては、優れた市民と定義されるための要求は、善き者に比べればより低いものである。アリストテレスは、市民の「秀でた一芸」を強調する。つまり、市民が優れた市民と呼ばれるためには、ある種の一定の役割分担において、ポリス共同体に貢献すればよいのである。第三に、善き者の徳と優れた市民の徳は行為の始動因が異なっている。すなわち、善き者の徳は、理性の選択によるが、市民の徳は法律に従うものである。そのため、アリストテレスが求める善き者の徳には、優れた市民の徳より厳しい要求がある。また、優れた市民よりも、善き者になることの方が難しい。ただし、この章で筆者が強調するように、本質的に優れた市民の徳と善き者の徳は対立しているものではない。両者の徳の差異は、主にその程度の差異にあると筆者は考えている。理性に関わる徳と性格に関わる徳という二つの徳の分類に関して、筆者はアリストテレスの理論に基づき、善き者にとっては理性に関わる徳の方が強調され、優れた市民にとっては性格に関わる徳の方が要求されると考えている。

第四章において、筆者は市民的友愛について議論する。優れた市民としての徳を探求した後、新たな疑問が生じる。つまり、ポリスはどのようにして多種多様な市民を調整して組み合わせるのかという問題である。答えは、市民たちにおける友愛である。では、市民的友愛は、アリストテレスの言う倫理学における友愛(philía)と同じものなのだろうか。この疑問を解明するには、市民的友愛の本質を探究する必要がある。アリストテレスは友愛を、善に基づく友愛、快楽に基づく友愛、有用性に基づく友愛という三種類に分類している。しかし、アリストテレスはPol.において、市民的友愛は「善いもの」、「快いもの」、「有用なもの」のどれに該当するかを明らかに示していない。筆者は、市民的友愛は本質的に有用性に基づく友愛にかなり近いものだと考えている。その理由は、まず、アリストテレスが『エウデモス倫理学』(以下ではEEと表記する)における市民的友愛は市民相互の有用性に基づいて成立していることを明らかにしたからである(EE1242a6-13)。第二に、友愛の成り立つ範囲からみれば、すべてのポリスの市民たちにおいては、善に基づく友愛を実現することでは不十分であるように思われるからである。ポリスは善き人と悪しき人を含んでいるため、すべての市民たちが徳に基づいて互いに似た善き友人同士になることは極めて難しい。低劣な者たちは快楽あるいは有用性のゆえに友人同士になる。彼らは善に基づく友人同士になることは不可能である。アリストテレスは多くの人々と友人関係を結ぶことは「政治的な仕方」によって実現されると考えている。また、有用性に基づく友愛は数においては優勢であり、友愛の大部分を占めている。第三に、市民的友愛は相対的に安定しており、市民同士の有用性に対する需要は継続的に安定している。第四に、市民的友愛は均等性に基づくものである。アリストテレスによれば、市民的友愛を維持するためには、等しさが非常に重要である。市民的友愛は共同の利益を目指しており、市民同士は互いに役に立たなくなれば、互いに知らなくなる。以上の分析によって、筆者は市民的

友愛が本質的に有用性に基づく友愛に近いと考えている。また、筆者は市民的友愛が本質的に多元的なものであり、市民的友愛こそが有用性に基づく友愛における良い状態だと考えている。

終章は本論文の全体に関するまとめである。上記の分析を通じて、中間という考え方がアリストテレスの理論において重要な位置を占めていると筆者は考えている。アリストテレスは、「中間性」の本質はある種の「適切さ」と指摘している。中間思想は、最善の国制と優れた市民に関するアリストテレスの議論に反映されている。一方で、アリストテレスにおける個人の幸福とポリスの幸福は、実際に正義と自足性への追求を体現している。最後に、ポリスと個人、どちらが先に形成されたのかについて、ポリスはその発生過程では個人に遅れるものであるが、本性的には個人より先なるものであると筆者は認めている。アリストテレスの理論には、個人がポリスより先に形成したという記述もあるが、これは全体の結論にはあまり影響しないと筆者は考えている。

論文審査の結果の要旨

氏 名	李 倩
論 文 題 目	アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について
<p style="font-size: 1.2em; margin: 0;">要 旨</p> <p style="margin: 10px 0;">李倩氏の博士論文「アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について」は、アリストテレスの政治哲学における個人と国家（ポリス）の関係について、『政治学』をおよび『ニコマコス倫理学』をはじめとする倫理学著作、および『デ・アニマ（魂について）』などの魂論・人間本性論などの著作を分析することで、その解明を試みたものである。取り扱う問題は多岐に渡るが、全体に通底するのは、個人に関わる事柄と国家に関わる事柄の優先関係・序列・対応関係はどのようなものであるかという問いである。この問いは、アリストテレスにおいて個人の善に関わる倫理学と社会の善に関わる政治哲学（ポリス学）がいかなる基礎づけ・非基礎づけ関係にあるのかというアリストテレス解釈上大きな問題に関わりと同時に、アリストテレスの議論の内に見出される個人の利益と国家の利益に関する一定の（少なくとも表面上の）緊張関係を解きほぐすという意味合いも併せ持っている。その点で本博士論文は、アリストテレスにおける実践学の内実を解明するために真正面から立ち向かいつつテキストおよび先行研究と格闘する、意義深い試みである。以下、章ごとにその概要と講評を記す。</p> <p style="margin: 10px 0;">第1章「政治哲学における「善」に関する考察」では、国家における福利の成立の基礎となる「善（agathon）」をめぐるアリストテレスの議論を整理・分析することを通じて、彼が個人の善と共同体の善のどちらを優先しているのか（一般的に問題化すればアリストテレスは個人主義者か全体主義者か）という解釈上の問題にアプローチしている。李氏は、アリストテレスの論述は両者の間で揺れ動いておりどちらか一方に明確に与していると解することは適切ではなく、個人の善と共同体の善は「類比（analogia）」的な関係にある、また、共同体を構成する個人における善の成立によって共同体全体の善が成立するという whole-part conceptions 説がかれの立場に近い（すなわち極端な全体主義はとらない）、と主張する。さらに李氏は、このような穏健な個人主義者としてのアリストテレスの議論には、かれの倫理学におけるいわゆる中庸理論が影響を及ぼしていることを指摘している。一連の議論は先行研究の周到な整理を経ており評価できる一方、アナロギアの議論についてはそれを越えて独自の議論を明瞭かつ説得的に提示しているとみなすには今一步の感がある。とはいえ、倫理学における中庸理論との関係性の指摘など興味深い論点も指摘されており、評価することができる。</p> <p style="margin: 10px 0;">第2章「アリストテレスにおける最善の国制」は、アリストテレスが正しい国制として認める三つの国制（王制・貴族制・共和制）のうち、どの国制を最も優れた国制であるとかれが考えているのかをめぐる考察である。李氏の整理によれば、アリストテレスは、理想的・思考実験的な意味では王制を最善と見なしつつも、現実の社会における実現可能性という観点からは比較的少数の複数の有徳な人々による貴族性が最善であり、さらにいえば、実現可能性と国制の墮落回避という観点からはさらに多数の比較的有徳者からなる国制が穏当であると考えている。また、国制の評価は普遍的にはなく、その社会ごとの個別的な状況を勘案してなされるべきであるという発想のもとでいわゆる「中間の国制」がアリストテレスによって提案されていることを李氏は指摘している。一連の論述はテキストの概観的な整理に終始している面があることは悔やまれるが、一定の分析が提示できていることは評価できよう。</p>	
主査記載 氏名（自署）	

続く第3章「善き者の徳と優れた市民の徳について」では、『ニコマコス倫理学』で展開される徳の理論に基づく「善き者の徳」とポリスの構成員として求められる「優れた市民の徳」の異同が、ポリスのあり方や支配者に求められる有徳性の問題とも絡めつつ論じられる。基本的な主旨は、善き者の徳と優れた市民の徳の違いは、1) 前者における徳の単一性と後者における（当人が属する社会階層や、国制の種類やあり方の違いに応じた）多様性、2) 前者における理性の支配的統括と後者における法律の統括の重要性などにあり、排他的な関係にあるのではなく求められる有徳性の厳密性の違いにある、というものである。また、理想的な国家において両者は一致すること、優れた支配者は善き者の徳を備えている必要があることも示される。本章の考察も、前章と同様にテキストの概観的な整理に終始している面があることは否めないが、善き者の徳と優れた市民の徳の違いを『ニコマコス倫理学』における思想的徳と性格的徳との違いに関連づけるなど、興味深い知見は荒削りながら一定の仕方では提示されている。

第4章「個人とポリス共同体の繋がり——市民的友愛」では、「善き者の徳」と「優れた市民の徳」の関係に連動する問いである、アリストテレスの友愛論における「市民的友愛」の位置付けについて考察される。アリストテレスは倫理学著作で3種類の友愛（善に基づく友愛・快に基づく友愛・有用性に基づく友愛）を提示し、善に基づく友愛を第一義的で最も優れた友愛として評価している。李氏は、市民的友愛のあり方をこれら3種類の友愛との異同という観点に着目しながらテキスト分析を行い、市民的友愛は基本的に国家の構成員が各自の幸福実現のために互恵的な関係を結ぶ意味で「有用性に基づく愛」に親近的であると言えること、そしてそのことはできるだけ多数の友愛が国家の中で成立するためには一定の合理性を有していること、安定性・持続性と等しさ・均衡性が市民的友愛の特色であることなどを指摘している。先行研究の整理・分析もそれなりに周到であり、論文著者なりの一定の知見が提示されていることは評価できる。

最終章である第5章「政治哲学における個人とポリス共同体」では、論文全体の俯瞰が行われる。各章を総合的に捉えた際に浮かび上がるのは、アリストテレスの政治哲学において、かれの倫理学における中間・中庸（mesotês）という知見の影響が、議論の随所にいわば通底的に見出されるという点である。それは例えば、最善の国政と優れた市民に関する議論、個人の幸福とポリスの幸福の関係をめぐる議論などにおいて典型的に示されている、と李氏は指摘する。氏の指摘は事柄として興味深いものであるが、だとすればアリストテレスにおける哲学体系全体と実践学の関係性、および倫理学と政治哲学の関係性を考える上でどのようなことが語りうるのかに関しての自力の検討（特に、批判的な検討）は今一步の感がある。とはいえ、倫理学と政治哲学の関係性を考える上で重要な指摘であることは確かであり、一定の評価はできよう。

以上から本論文の審査委員会は、李氏の博士論文「アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について」が博士（学術）の学位を取得することに関して、合格に相当するとの判定を下すことをここに報告する。

審査委員

区分	職名	氏名(自署)	区分	職名	氏名(自署)
主査	教授	茶谷 直人	副査	准教授	如藤 寛治
副査	教授	中 真生	副査	講師	新井 拓哉
副査	教授	佐藤 昇			